



よりよい未来を創造する力が育つ 学校を目指して



柏市立柏中学校校長 さかい としひこ 逆井 俊彦

1 学校を創るとは

学校がなかったら……、教育がその効力を失えば、人々の心は荒廃し、人間関係は殺伐とし、社会は秩序を失い、文明の発達は歩みを止めることになるだろう。学校が存在する意義は、「子供たちが将来豊かな社会を築き、幸せな人生を歩むことができるようにする。」ことだと考える。つまり、一人一人が幸せを感じ、一人一人をとりまいていく社会もまた幸せな状況になることである。そのために必要な資質・能力を子供たちに育んでいくのが学校の使命であり、「学校を創る」ことは、「未来を創る」ことなのである。

2 仕事の流儀

学校を創るのは、一人一人の教職員の職務遂行によるところである。一人一人の教職員が教育の目標を理解して、よりよく職務遂行することがよりよい学校を創ることになる。年度始めに、柏中の仕事の流儀を確認するために、イソップ寓話を例にとり、教職員に問うことにした。

『3人のレンガ積み職人』（イソップ寓話）
世界中を旅している人が3人のレンガを積んでいる人に出会い、それぞれに「あなたはここで何をしているのか？」と訊ねた。
・すると一人は「見ればわかるだろう？レンガを積んでいるんだよ」と答えた。
・もう一人は「ここで大きな壁を作っているんだよ」と答えた。
・三人目は「俺達は歴史に残る大聖堂を造っているんだよ」と答えた。

『あなたは柏中で何をしているのですか？』

『それはできていますか？』

『なぜそう言えるのですか？』

教職員が教育の最終目標を意識して職務に

取り組み、また、取り組んでいることについて、これをやるとどうなる、どう変わるかを語ることができること、そして、取り組んだ成果を目に見える形で語ることができることが大切であると考え。一年間を通して、3つの問いに答えながら、マネジメントサイクルを回して、教育活動をスパイラルアップしていく。

3 例年通りを疑う

年間を通して様々な提案がなされるが、文書はすべて電子データとなっているため、前年度の文書の年月日や担当者を変更する程度で提案されがちである。この教育活動の目的を達成するために例年通りが本当に最善の策なのだろうかを自問し、少しでも改善できるところはないか、吟味的思考（クリティカルシンキング）を大切にしている。まずは、例年通りを疑うことから始めることにしている。

職員室前に全校の出欠席状況一覧表があるが、これは誰が何のためにどのように活用しているのかが話題となり、協議して、端末上で生徒の出欠席状況を共有した方が効率的ではないかとなった。試験的に2週間実施して、問題がないことを確認し、出欠席状況一覧表は撤去されることになった。

小さな変化ではあるが、当たり前にあったものが、教職員の吟味的思考により改善された。良いアイデアであるときもあるが、そうでない時もある。やってみて上手いかなければやめればよいぐらいのつもりで取りかかる。

4 「知性」を育む

AIに代表される飛躍的な技術革新による急激な社会の変化や、新型コロナウイルスの爆発的な流行、ロシアの突然のウクライナ侵攻などの予測ができないような状況で、どう考え、判断して行動したらよいか、自分なりの納得解、最適解を見出すことができる「知性」を育むことが時代の要請である。

授業の展開は、授業の始めでの“?”(なぜ、なになどの疑問)が、授業の終わりに“!”(わかった、できたなどの解決)となるように計画する。“?”から“!”の過程で、「自分で考える」、「仲間と考える」、「表現する」活動を大切にして、「主体的、対話的で深い学び」を実現する。また、学習の自己調整力の向上を図るための授業の「振り返り」の工夫を校内研究のテーマとして取り組み、自立的に学ぶ習慣を育むようにする。

学びのツールとして、学校図書館の活用を積極的に進めている。授業での活用に加えて、早朝や長期休業中の開館、読み聞かせやブックトークの実施など、活字を読む機会を多くもてるようにしている。また、自主学習を定着させるために、家庭学習ノートを毎日点検して、コメントを記入している。いずれも地域ボランティアの協力を得て行っている。

さらには、夢や目標をもつことは、現実をよりよくしていこうとする意欲を生むことから、キャリア教育の一環として、社会の各分野で活躍している著名人を招聘して、「いきいき夢プラン講演会」を実施している。校長が希望する人物の講演を、柏中後援会が費用と運営を負担して開催していただいている。

5 「徳性」を育む

一人一人が幸せを感じ、一人一人をとりまいている社会もまた幸せな状況を実現するためには、よりよい人間関係を築いていくため

の協調性や思いやり、コミュニケーション力(社交性)といった「人と関わる力」と、自己肯定感や自立心、自制心などの「自分自身に関する力」に重点を置いて「徳性」を育むことが必要である。そのためには、生徒会活動や学級活動、行事、ボランティア活動などを通して、人と人が関わる経験をより多く積み重ねることが大切である。

学校の諸活動は、当事者意識がもてるよう「全員参加の生徒会」をスローガンに掲げ、生徒が自治的に取り組んでいる。「自分は学校や学級を変えることができる。」という意識がもてるように支援・指導し、将来的には「自分は国や社会を変えることができる。」という意識がもてるようにしたい。

柏中学校区の生徒会と児童会で「柏中サミット」を開催し、小中学校の9年間で身につけたい資質・能力を「かしわっ子宣言」「新かしわっ子宣言」として採択し、学校生活を送る上での行動指針としている。

また、柏中には「ゆいの会」という学校支援ボランティア団体が地域にあるが、「こどもゆいの会」という生徒のボランティア組織を立ち上げ、活動を通して社会とつながり、人間性豊かな生徒の育成を図っている。

6 おわりに

教職員の知恵を結集して、美しい学校経営計画はできた。立案には大変な労力を要する。まさに、産みの苦勞であり、ともするとそこで満足しがちである。しかし、肝心なのは、その後どう計画を実行していくかである。まさに、育ての苦勞であり、実行なくして成果は得られない。「計画の立案」と「計画の実行」は車の両輪であることを肝に銘じて、学校経営に取り組んでいく。



つながりを大切にした教育活動の実現に向けて ～働き方改革の取組～

木更津市立真舟小学校教頭 あきほ 秋保 よしひろ 佳弘



1 はじめに

本校は、請西小学校の児童数の増加に伴い、平成26年度に開校（木更津市内の小学校としては33年ぶり）した学校である。

学区は、古くからの住宅地である真舟地区、新しい住宅地である請西南地区・請西東地区の一部（6～8丁目）となっており、新旧の住宅地が入り交じった学区である。

学校周辺には、住宅街からバイパスへ抜ける道路があり、自動車等の交通量が多い。特に、朝夕の通勤時間帯は、激しい交通量となっている。また、商業施設も充実しており、大型電気店、複合型スーパーをはじめ、大型衣料店や飲食店等も多く、人の出入りや車の量が日中・夜間共に多い。

住民は、昔からの住民と新しく転入してきた住民が混在している。児童についても、他の学校や市外からの転入生も多く、児童相互のつながりが希薄な面がある。

そのため、児童相互の「つながり」を重視することはもとより、地域と学校、保護者と学校、保護者と保護者、地域と保護者といった学校を中核とした地域全般の「つながり」を大切にした教育活動を展開することが大切である。学校に通う児童同士が仲良く過ごし、さらに教職員と児童が一緒になって教育活動を展開し、その取組が家庭・地域に還元されるような家庭・地域・学校が一体となった教育を目指している。

2 学校経営方針

(1)学校教育目標

人とのつながりを大切にする真舟っ子の育成
～かしこく・あかるく・たくましく～

(2)今年度の重点

- ①学習に前向きな学級・集団づくり【学習習慣の形成】
- ②いじめのない学級・集団づくり【自他を大切にする心の育成】
- ③安心・安全意識の高揚と危機管理能力の向上【健康・安全意識の確立】

3 「つながり」を大切にした教育活動を展開するために意識していること

- (1) 学校と外部機関（含PTA）とをつなぐ窓口となり、家庭や地域、関係機関との連携を図りながら、学校経営に携わっていくこと。
- (2) 日常のコミュニケーションや観察を大切にして、教職員一人一人の健康状態や悩み・心配事などを把握し、教職員が安心して職務に当たれるよう、管理職間で情報を共有すること。
- (3) 教職員が心身ともに健康を保つことができる環境を整えるために、働き方改革を推進すること。

4 働き方改革に向けた具体的な取組

子供たちの成長に必要な効果的な教育活動を持続的に行うためには、教職員が心身とも

に健康を保つことができる環境を整えることが大切である。そのために、以下のような取組を行っている。

(1)意識改革（限られた時間の中で、計画的・効率的に業務を行おうとする意識）

- 目標申告シートに働き方改革に関する視点を入れ、意識化を図る。
- 会議資料の事前配付（印刷・綴じ込みはスクールサポートスタッフが行う）に努め、会議の効率化を図る。
- 勤務時間外に会議や打合せは行わない。
- 解錠7時、施錠19時に努める。
- 週1回（金曜日）の定時退勤を目指す。
- 市教委の指導のもと、長期休業における年間5日以上为学校閉庁日の設定。
- 長期休業期間中の定時退勤と全職員の夏季休暇の完全取得、1週間以上の連続休暇取得の推進。

(2)業務改善（業務量を減らす）

- 通知表2期制による成績処理事務等の負担軽減。
- 年間の授業時数を確保した上での短縮日課の設定。
 - ・成績処理等の校務を行うための短縮日課
 - ・長期休業明けに、作品整理等の事務処理を行う時間確保のための短縮日課
- 家庭訪問から家庭所在地確認へと方法を変えることによる負担軽減。
- 朝（時間外）の陸上練習の削減。
- スクールサポートスタッフの活用。
 - ・会議資料等の印刷、綴じ込み
 - ・手紙やプリントの印刷、仕分け、配付
 - ・環境整備作業 等
- 地域や保護者のボランティアによる登校指導。
- 運動会における全体練習の回数削減・準備期間の短縮。

○委員会活動の裏での企画会議の実施。

○打合せ等の書面開催の導入。

○校務の効率化のためのICTの活用。

- ・業務上作成したデータの共有（共有フォルダの活用）
- ・Google フォームを利用した出欠確認やアンケートの活用
- ・掲示板を利用したお知らせ 等
- 出退勤カードの導入による入力業務の軽減。

(3)課題

- 新型コロナウイルス感染症対策のための業務増加。
- 感染症対策の観点から中止・縮小した行事についての今後の見通しや修正等。
- ICTに関する研修のための時間の確保。
- さらなる業務改善。

5 おわりに

教職員一人一人が心身ともに健康に職務に当たることが、教育活動を展開する上での大事な基盤となると考え、働き方改革に取り組んでいる。

コロナ禍で、これまでに中止や縮小となった行事が多々ある。今後、新型コロナウイルス感染症が落ち着いてくると、中止や縮小した行事を復活させていくようになる。しかし、安易に復活させるのではなく、教育的意義と照らし合わせて、働き方改革も念頭に置いて精査していくことが大切である。

教頭の役目は、校長の意を汲んで学校経営方針を柱として、学校を支えていくことである。地域・家庭（保護者や子供）・学校職員とのつながりを大切にして信頼関係を築き、「チーム真舟」として力を発揮していけるよう、教頭としての職務に励んでいきたい。



学校を動かす

役割を知り、役割を果たす

県立四街道特別支援学校主幹教諭 あずかり さとこ 預 智子

1 はじめに

本校は、病気の治療が必要な児童生徒が学習する特別支援学校である。小・中・高等部の三つの学部から成り、学習の場は校内の他、隣接する病院のベッドサイド、他市の病院内に設置されている院内学級（コロナのため現在は遠隔授業）、児童生徒宅等複数あり、それぞれの場で授業が行われている。

また、各学部とも複数の教育課程を編成しており、一つの学校でありながら複数の学校が存在しているかのような特徴がある。

2 教務主任の役割

(1)学部間の調整

本校で教務主任に求められるのは、小・中・高等部をいかに調整してまとめるかということである。学習の場が分散しているということは、日常的に教員が分散しているということである。お互いの指導を目にしたり、他学級・他学部の児童生徒に関わったりする機会がどうしても少なくなってしまう。このような状況で、学校を一つの組織として機能させるには、まずは各学部を掌握している学部主事と連携し、今何が起きているのかを細かく把握する必要がある。定例の主事会は、情報共有のための貴重な時間ではあるが、日々起こっていることをタイムリーに知ることまではできない。些細なことでも、「とりあえず教務主任に話してみるか」と思わせる存在になれるかどうかが鍵である。

(2)裾野を広げる

学部主事と連携する一方で、個々の職員とのつながりも必要である。教務主任にならな

ければ絶対にしなかったと思うが、ちょっとした機会を捉えては、職員に意図的に言葉をかけるように努力してきた。児童生徒のこと、同僚のこと、自身のこと等を話してもらえることが増え、学級の様子や職員の間関係が見えてきた。こうして得た情報は、思いがけない時に役に立つことがあり、児童生徒の対応や保護者とのやりとりを円滑にすすめることにつながった例もある。また、気になることはその都度校長や教頭に伝えておくことで、それぞれの立場で目を配ることが可能になり、問題が発生する前に気付いたり、迅速に対応したりすることにつながっている。

(3)学校間の情報交換

教務主任になってみると、他校ではどのように対応しているのか、情報をもらいたいと思うことが度々ある。気軽に連絡できる教務主任が他校にいるかないかの違いは大きい。校内にとどまらず、学校を越えて人間関係を築くことも、業務を効率的に進めるためには必要なことであると実感している。同時に、自分からも的確な情報を提供できるように準備しておかなければならない。

3 おわりに

特別支援学校の存在が広く知られるようになり、児童生徒の過密化という問題を抱えている学校も増えている。特別支援教育の必要性が理解された結果と言えるのかも知れない。この教育に期待をしている児童生徒や保護者を裏切ることなく、信頼される学校づくりを実現するために、私自身の役割を果たしていきたい。



子供たちの力を伸ばしていくために

成田市立大栄幼稚園教諭 どい ゆか 土井 裕加



私が子供たちと関わる中で気を付けていることは、子供たちの得意なことや苦手なことの両方を見つけ理解していくことである。子供たちは、幼稚園生活の中で様々な物に興味をもち関心を広げていく。教師は、その姿を見守り、自分の力を発揮することができるように援助していくことが必要であると考えている。私は、初任者研修を通して、環境構成の大切さを再確認した。子供たちに経験してもらいたいことを踏まえ、個々の力を伸ばしていくためにはどういう環境にしていっていいのかわかった。

今年度は、4歳児クラスの担任をしている。子供の気付きや発見などに共感しながら遊びを发展させたり、様々な経験をしたりすることができるようにしていきたい。また、必要に応じて子供同士のやりとりの橋渡しをし、相手の思いを知らせることで友達との関わりを広げたり、必要な言葉を身に付け、いろいろな方法で表現することを楽しんだりすることができるようにしたいと思っている。環境の構成に決まった答えがあるものではないので、その時々の子供たちの姿に合わせよりよい環境を作ることができるようにしたい。子供たちにとって自分の力を発揮しやすい環境となるよう日々考えていきたい。



つなぐ

浦安市立北部小学校教諭 もりおか まいろ 森岡 舞色



私は、採用2年目の今、子供たちの学びが未来へと受け継がれていく教職という仕事の責任の重さを改めて実感している。

私は、昨年度受け持った学年を引き続き担当している。昨年度の子供たちの様子と現在の姿を比べると、成長している場面を多く見ることができている。その中で特に感じていることは、これまで見守ってきた多くの先生方の思いや指導が子供たちに受け継がれているということだ。そう実感したことで、この仕事への使命感や責任感、そしてやりがいを感じた。

初任者として過ごした昨年度は、ただ一日一日を安全に過ごすことだけで精一杯だったが、その中でも、「人の失敗を受け止めること。」「マイナスな発言をするのではなく、応援の言葉に変えること。」を大切にしてきた。

今年度に入ったある日、子供たちの姿の中に、困っている友達に率先して声をかけていたり、応援する言葉を意図的に発言したりする様子を見ることがあった。昨年度から大切にしてきた私の思いが子供たちの中にも育まれていることを感じ、嬉しく思った。

今後も、子供たちにとって大切な時間を共に過ごしているという気付きを大切にしていきたい。そして、私を「先生。」と慕ってくれている子供たちへの感謝を忘れず、子供たちの成長を次の学年へとつなげられるよう、これからも学び続けていきたいと思う。



算数科における自分の考えを進んで表現し、 学び続ける児童の育成 —ふきだしを活用し、学習を振り返ることを通して—

いすみ市立大原小学校教諭 たかおか けんしん 高岡 顕慎



1 はじめに

本校は、令和3年度より2年間、「ちばっ子の学び変革」推進事業（検証協力校）の指定を受け、校内研究で取り組んでいる。その中で、私自身が、令和2年度千葉県長期研修生として学んだことを還元しつつ、全校で取り組んでいる実践について、紹介する。

2 実践内容

ふきだしを使うことで、児童に自分の思いや考えを表出しやすくさせ、それを基に学習を振り返り、その振り返りを次時の学習に生かすことで、学びにつながりをもたせる。このような学習スタイルを繰り返すことで児童は「学び方」を学び、研究主題に迫ることができると思う。

(1)自分の考えを進んで表現すること

①ふきだしの活用

「ふきだし」とは、児童が思ったことや考えたことを自由にノートに書かせるための、自分の思考を表出させるツールのことである。

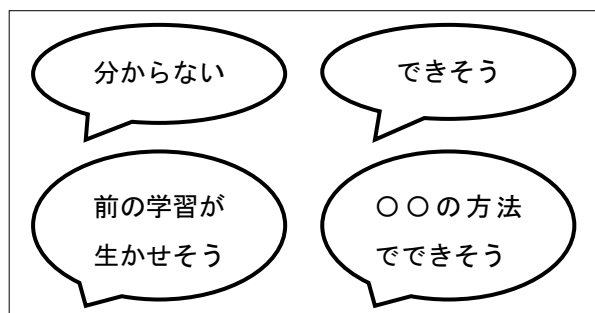


図1 ふきだしの例

児童が学習の中で思ったことや考えたことを、教師が見ることは容易ではない。また、

児童にとっても、自分がどんなことを考えたのか、記録に残しておかなければ、自身の学習を振り返ることは難しい。そこで、学習過程での疑問や気づき、考えを記録させる手立てとして、ふきだしを活用する。

例えば、学習問題を設定した後、見通しを立てる場面でふきだしを書かせる。最初は、「分からない」「できそう」など情意面の内容も、児童の思いの表出と捉え、認めていく。そうすることで、児童は安心して自分の思いや考えをノートに表出するようになっていく。また、書かれたふきだしを授業の中で取り上げ、共有していくことで書くことへの苦手意識の解消や自分の内にある思考を表出させる手助けとする。そして、書かれたふきだしを評価し、「前の学習の〇〇を使えばできそう」「こっちの方が簡単かな」のような内容を教師が授業で意図的に取り上げることで、内容も具体的に、自分の考えの根拠や友達の考えたことのよさや理解に迫る記述が増えていく。

②意図的な発問

昨年度、全校統一でふきだしを活用したノート指導に取り組むことで、児童は書くことへの抵抗感はなくなった。しかしながら、数学的な見方・考え方に迫る記述が少ないことが課題となった。そこで、今年度は、児童のふきだしの内容の質的向上を目指し、意図的な発問を手立てとすることとした。

教師が意図的な発問をすることで、児童自身が自分に質問をし、自ら考えていくことができるようになっていくと考える。そうするこ

とで、書く視点が明確となり、数学的な見方・考え方に迫る記述も増えていくと考える。

表1 意図的な発問例

問題把握	前時と比べて違うことは？ どうすればできそう？
比較検討	それぞれの共通点は？ 条件が変わったらどうなる？

(2)学び続ける児童について

①学習の振り返り

中村（2008）は、「算数・数学の授業で何を他者の考えに対してどのように思い、自己の考えのどこを見直したのかについて書くことは、子どもが自分自身の学習の状況を的確に捉えることになる。特に、思考力を自己評価することにつながる。」と学習を振り返ることの意義について述べている。「主体的に学習に取り組む態度」の評価の観点としても有効な手立てであると考え。その際、本時で自分がどのようなことを考えたのか、ノートにふきだしを基に学習を振り返ることで、自らの学習状況を的確に判断することができるようになる。また、ただ学習を振り返るのではなく、視点を与えることで、より具体的な振り返りを行うことができるようになる。そのため、本校では、全校統一で振り返りの合言葉（大原の祭りにちなんで「わっしょい」）を作成し、毎時間、その視点に沿って学習の振り返りを行っている。

初めは、具体的な内容が書けない児童もいたが、友達のよい振り返りを紹介したり、よいノートのコピーを教室に掲示したりすることで、徐々に内容も具体的になっていった。また、振り返りを書かせた際は、ノートを回収し、教師が適切に評価し、朱書したコメントを返すことで、児童の意欲付けや質の向上にもつながっている。

また、ノートに字を書くことが難しい学年

では、顔の表情をかいたり、選択させたりすることで自分の学習を振り返らせた。

毎時間、積み重ねることによって、記述内容にも変容が見られてきた。今後は、自分の書いたふきだしと振り返りとの関連をより意識させ、継続して取り組んでいく。

表2 中学年の振り返りの視点例

わ	・～すればよいということが分かった。 ・～が分かるようになった。
っしょ	・～の時とやり方が同じ。 ・○年生でやった～とやり方が同じ。 ・～さんの考え方と同じ。
い	・生活の中の○○に生かせそう。 ・違う条件でも使えそう。 ・○○でもやってみたい。

②導入における前時の振り返りの取り上げ

例えば、「面積」の学習で「三角形」の求積の学習をした振り返りの中に、「三角形の公式を使えば平行四辺形の面積も求められそう」などの記述を、教師が意図的に次時の導入で取り上げることで、学習につながりをもたせるようにした。そうすることで、主体的に学習に取り組んだり、既習事項とのつながりを考えたりしながら、学び続ける児童の育成につながると考える。

3 おわりに

児童の学力向上に近道はないと考える。毎時間の積み重ねが何よりも大切である。今後も全校の先生方と指導の手立てについて共通理解を図り、全ては子供たちのために共に学んでいきたいと思う。

【引用参考文献】

- ・中村享史『数学的な思考力・表現力をのばす算数指導－教材の本質を問い、学び合いを通して－』明治図書 2008年



授業づくりで大切にしていること ～教師の専門性を見つめなおして～

習志野市立第七中学校教諭 ながい 永井 けんご 健吾



1 はじめに

今年で教員生活12年目を迎えた。12年間の教員生活を振り返り、働き始めた当初と現在を比較すると、教職に関する知識や技能をはじめ、多くの点で変化があるように感じている。その中でも特に大きな変化を感じているのは、教育観や授業観といった考え方の根本の部分である。本稿では、教員として働き始めた当初の授業に対する考え方と、現在の考え方の違いや変化のきっかけをまとめてみたいと思う。その上で、私が考える授業づくりで大切にすべきと考えているポイントを記してみたい。

2 社会科教師駆け出しのころの授業観

社会科教師として働き始めた当初、授業のポイントとして、次のようなことをよく耳にした。「教科書見開き1ページが1時間の目安となること」、「受験で差がつかないように、もれ落ちなく指導すること」、「驚きや意外性のある教材を開発すること」。そうした中で私は、「教科書の内容を膨らませて、面白いエピソードを交えていけば、生徒も授業にのめりこむだろう。これこそが良い授業である」、このような授業観を持つようになった。日々の教材研究の取組は、例えば新書を読んだり、博物館に足を運んでみたり、市内の教育研究会で学んだりといったことであった。その上で、授業づくりにおいて重視していたことは、とにかく社会的な事象の情報を収集、網羅すること、そして、それらをいかにわかりやすく生徒に伝達するかということにあった。教科書に示されている知識を、いかに正確に、

そして豊かに教授するかに重点を置いて授業を行っていた。そのような中、経験年数を重ねるにつれて、自分自身としても、ある程度の授業スタイルが確立されたと思うようになっていた。

もちろん課題に思うこともあった。それは、多様な生徒がいる中で、どうしても社会科の学習に興味を持ってない生徒がいるということ（例えば、「なんで歴史なんか学ばないといけないの?」という疑問）。受験勉強に必要なだから、とりあえず覚えておこうとする学習観を持つ生徒がいるということ。こうした課題は、恐らくどの先生方も少なからず抱えているのではないだろうか。私自身も、これらの課題については大いに悩んでいた。

3 授業観を揺さぶる考え方との出会い

このような状況の中で、いくつかの「授業に対する考え方」との出会いによって、私の授業観は大きく揺さぶられることになった。その中の一つを取り上げてみたい。それは、「教師の専門性」に関する考え方である。二人の専門家の議論を紹介したい。

社会科教育学者の渡部竜也は、自身の著書において授業づくりの際、次のことがらを問うことの重要性を指摘している。

- ①社会科教育の目的（「平和で民主的な国家・社会の形成者」＝「主権者」の育成）に照らして、授業で取り上げようとしている内容は適切かどうか吟味すること。
- ②授業を通して育てようとしている「主

権者」とはどのような能力、姿勢、態度を備えているのかを十分に想定すること。

- ③なぜその社会認識を深める必要があるのか、その社会認識を深めることが主権者の育成とどのように関連するのか吟味すること。

また、教育学者の北田佳子は「教師の専門性とは、決して単に専門的知識や技能を数多く獲得していることにあるのではなく、その知識や技能がいったい誰のために、何のために生かされるべきなのかという、明確な『ビジョン』と強い『動機』とが結びついた中でこそ、発揮される」と指摘している。

「教師の専門性とはより多くのより正確な知識を保持することにある」、と考えていた私は、二人の議論を受けて、自身の授業実践について大いに反省の余地があることに気がついた。それは、自分は一体何のために授業をしているのか、どういう人を育てようとしているのか、教育の目的の根本部分に曖昧さがあるということである。

このように考えたとき、次のようなやり取りにおいても反省点が見えてきた。例えば、私たちは指導案検討をする際に、内容の正確さや発問の吟味に時間をかける一方、育てようとしている生徒像や目標の吟味が疎かになりがちではないだろうか。「〇〇を通して××ができるようになる」という目標に対して、「こういう取組をすべきでは?」「ああいう取組をすべきでは?」という議論をする。しかしながら、「なぜ××ができるようになる必要があるのか?」「××ができるようになることが、有意な主権者を育てることにつながっているのか?」という視点が欠如していることに気付いたのである。生徒の学びを充実させることに異論はない。しかしながら、「どのように教えるか」をよく考える一方で、「何を、なぜ教えるのか」という根本の視点

に甘さはないだろうか。

4 教材選択の変化

「どのような社会事象を取り上げることが、生徒を有意な主権者として育てることにつながるのか」、という視点を得たことで、授業づくりにおける教材選択（取り扱う社会事象）が大いに变化した。現在の論争的な問題を取り上げたり、マイノリティの視点から社会の仕組みを見つめ直し問題を指摘するような課題を設定したり、社会事象を網羅するのではなく構造の理解を促すような問いを設定するようになった。授業づくりにおいて、こうした視点を持つことの重要性を強調したい。そして、こうした視点に基づいて授業づくりを進めることが、現在の学習指導要領で求められている主体的・対話的で深い学びにも通じるのではないだろうか。

5 最後に

教育は目的のある営みである。しかしながら、昨今の労働環境に鑑みると、どうしても前例踏襲による手段の目的化が様々な場面で起こってしまっているのではないだろうか。そして、それは授業づくりについても同じことが言えるのではないだろうか。私たちは生徒にどのような力をなぜ付けさせたいのか、そもそも論に立ち返る必要がある。そしてこのことで、授業はもちろん、それ以外の教育活動にもさまざまなヒントが得られるように感じている。本稿が、明日以降の授業づくりの参考になれば幸いである。

6 参考文献

- ・渡部竜也（2019年）「主権者教育論」春風社
- ・日本教育方法学会編（2014年）「授業研究と校内研修－教師の成長と学校づくりのために」図書文化社